

少女の手を取ります。少女は起き上がりました。それは少女のために主イエスが立ち上がったと同じ言葉ですから、主イエスが立ち上がった、主イエスが手を取り少女が立ち上がったということになります。

こうして見ると、この二つの出来事が結びついている理由がはっきりします。主イエスのところで二人の女性の歩みが交わるのです。主イエスの出来事が二つの人生を結び付けているのです。

わたしの信仰からわたしの信仰へ

父の願いも女性の願いもどちらも切実ですが勝手な願いです。主イエスを求めたところは一致しています。人の信仰は勝手に自分本位です。わたしたちも自分の願いばかりの祈りをし、他の人のために祈ることは少ないのです。信仰とはいえないような信仰ばかりです。しかし、主はそういうところにまで向かい振り向き、手を伸ばされるのです。

主イエスに触れたとき、それまでの「わたしの信仰」は主イエスによってもたらされる「わたしの信仰」に変えられることになりま。救いの恵みは主イエスによってもたらされるものです。主イエスとの出会いが、新たな「わたしの信仰」をもたらすのです。それは「主が与えてくださったわたしの信仰」です。なぜなら、この二年は失われた二年から、主イエスに出会い、主イエスが触れてくださるための一二年になるからです。主イエスは失われたものを探し求め、赴いてくださるのです。

主イエスの「立ち上がる」と少女の「起き上がる」が同じ言葉であることは先に申しましたが、一〇章八節では弟子たちを近くの町々

に遣わすにあたり、「病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい」の死者を「生き返らせ」に使われています。この言葉は復活を表すように用いられるようになりました。主イエスが立ち上がったので、それに触れた少女も立ちあがったのです。それは主イエスが復活をもたらすお方であることが、この少女の死にもかかわったのです。

愛の接点

二人とも主に触れたことが生涯のゆるぎない点となりました。そこに信仰があるのです。その信仰は愛を生んできました。弟子のペトロはペトロの手紙Iの一章八、九節にわたしたちの信仰について「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせない素晴らしい喜びに満ちあふれています。それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。」と書き残しています。

信仰の実りはキリストを見たことがないのに、愛し信じていることだと言います。それは、わたしたちから決して奪われることもなく、失われることもないものです。主イエスがお与えくださったからです。

わたしたちはこの女性の姿を思い浮かべ、この少女の場面を思い浮かべることによって、自分にも主イエスが手を伸ばしてくださっていることが分かるのです。それが主イエスが与えてくださった「わたしの信仰」になるのです。

主イエスに出会って与えられた、主イエスを愛する信仰こそ人生を決して失わせることのない「わたしの信仰」になるのです。

(七月一七日 公同礼拝)

六月講壇一覽

第一主日 (六月五日)

ペンテコステ・聖霊降臨日礼拝
「真理の霊がくる」

高橋和人牧師

第二主日 (六月一二日) 公同礼拝
「罪を赦す権威」

詩篇一三〇・一〜八
マタイ九・一〜八

高橋和人牧師

第三主日 (六月一九日) 公同礼拝
「新しい招き」

ホセア六・一〜八
マタイ九・九〜一三

高橋和人牧師

第四主日 (六月二六日) 公同礼拝
「信じる者の言葉」

イザヤ二八・一〜二
コリントI・一四・二〇〜二五

姜俔米牧師

七月講壇一覽

第一主日 (七月三日) 公同礼拝
「永遠の新しいさ」

コヘレト一・八〜一一
マタイ九・一四〜一七

高橋和人牧師

第二主日 (七月一〇日) 公同礼拝
「造り上げるために」

詩編六二・八、九
コリントI・四・二六〜四〇

姜俔米牧師

第三主日 (七月一七日) 公同礼拝
「あなたの信仰があなたを救った」

詩編六一・二〜五
マタイ九・一八〜二六

高橋和人牧師

第四主日 (七月二四日) 公同礼拝
「信じている通りに」

イザヤ四二・一八〜二〇
マタイ九・二七〜三四

高橋和人牧師

第五主日 (七月三一日日) 公同礼拝
「キリストの復活」

詩編二四・七〜一〇
コリントI・一五・一〜五

姜俔米牧師